

くぐり日記

太地町立博物館から

今年5月、韓国蔚山広域市南区の長生浦クジラ文化特区で開かれた祭典「2023蔚山クジラ祭り」。筆者も参加し、この祭りの中心地である「長生浦海洋公園」を訪れると、「長生浦鯨博物館」と「鯨生態体験館」、そして捕鯨船が見えてきました。

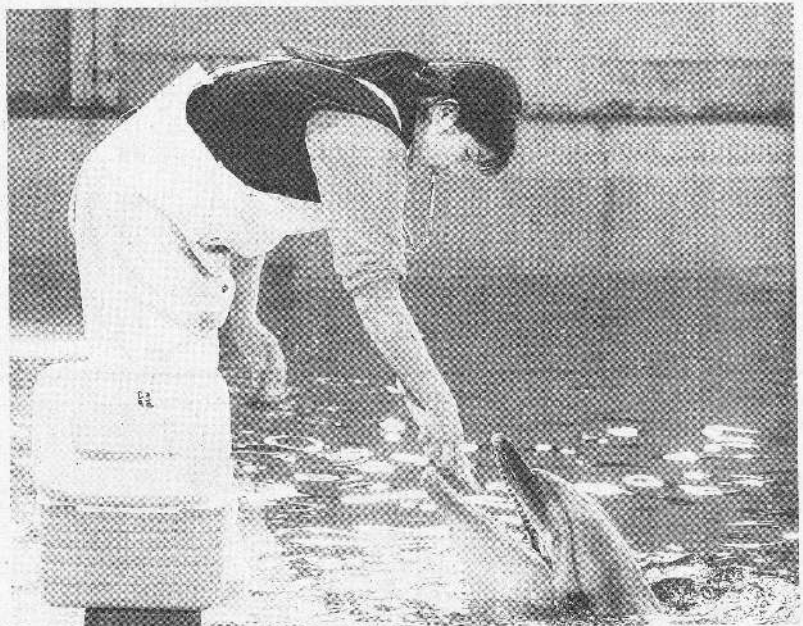
この光景は、太地町のランドマークである町立くじらの博物館と捕鯨船がある町内のくじら浜公園と似ています。が、偶然ではありません。

太地町と蔚山広域市南区の交流は20年近く続いており、この交流が長生浦海洋公園の整備に関わっているからです。このため、長生浦鯨博物館には太地町が寄贈したシャチの全身骨格が展示され、鯨生態体験館では太地町からやってきたイルカが暮らしています。

その鯨生態体験館に足を運びました。トンネルのように水槽の下に続く通路をくぐる、水槽に4頭のバンドウイルカが姿を見せました。くじら

韓国・長生浦旅行記 ③

交流続ける日韓のまち



韓国蔚山・長生浦でイルカを飼育するキム・スルギさん—2018年ごろ (キム・スルギさん提供)

1頭は、長生浦で2017年に誕生した雄のイルカで、筆者は誕生してすぐ長生浦に駆け付け、状況を見守ったことがあります。南区は、この新たな命に、長生ぎしてほしいという思いを込めて「コ・ジャンス(長寿)」と名付け、

特別に住民登録もしたのでした。コ・ジャンスはすっかり大きくなり、母親と見分けがつかないほどでした。

2階に進むと、観客席があり、ほぼ満席でした。筆者が座ると、「鯨生態説明会」が始まり、トレーナーが、イルカ

カヒレを手に持ち体の特徴を説明したり、体温を測って健康管理の方法を説明したりしていました。最後は、イルカがジャンプを披露し、歓声が上がりました。

4頭のイルカを飼育するのは6人のトレーナーです。技術交流を目的に太地町に来たトレーナーも4人おり、筆者と日本語であいさつを交わしました。

トレーナーのリーダーを務めているのは別施設で2006年にトレーナーになったキム・スルギさんです。太地町で約1年半、イルカ飼育の経験を積み、2009年にオープンした鯨生態体験館でイルカの飼育や展示の方法を築き上げて中心的な役割をしています。キム・スルギさんは「イルカを直接見て、どのよ

うな生き物かを知ってほしい」と意気込みを語りました。

ただ、鯨生態体験館によると、韓国では水族館関連法が見直され、鯨類のレクリエーションを目的としたショーを

禁止しました。さらに鯨類を新たに保有することも禁じられるといわれています。韓国の政策がもっと厳しくなることも考えられ、キム・スルギさんは「水族館でイルカが飼えなくなる日が来るかもしれない」と不安の声を漏らしました。

筆者は昨年の蔚山クジラ祭りにも参加し、トレーナーたちと韓国伝統酒のマッコリを酌み交わしました。このとき、うち1人が「コ・ジャンスの成長をずっと見届けた」と思いを語りましたが、キム・スルギさんは黙ったまま耳を傾けていました。

キム・スルギさんのそのときの表情が忘れられません。トレーナーたちは行き場のない思いがあるのではないのでしょうか。筆者の胸を揺さぶりました。

太地と長生浦の2つの「クジラのまち」が、これからもクジラと関わり、関係を深めていくことを願わずにはいられません。

(太地町立くじらの博物館 館長 稲森大樹)

原則、第1日曜日に掲載します。韓国・長生浦旅行記は今回で終わりです。